



自分を救うために学ぶ

Ronan Le Coadic

► To cite this version:

| Ronan Le Coadic. 自分を救うために学ぶ. ヨーロッパ研究, 2004, 4, pp.1-18. <hal-00905135>

HAL Id: hal-00905135

<https://hal.science/hal-00905135>

Submitted on 16 Nov 2013

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire HAL, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

ISSN 1342-2642

ヨーロッパ研究

EUROPEAN STUDIES

第4号

2004年7月

東北大学大学院国際文化研究科

ヨーロッパ文化論講座

自分を救うために学ぶ*

ロナン・ル・コアディク
小林文生 訳

はじめに

学ぶ (apprendre) とは、「知識を獲得すること、自分の記憶にとどめること」です。それはまた、「教える、教育する。誰かに何かを教える (apprendre)」(『リトレ辞典』) ことでもあります。以下の発表では、「学ぶことの意味 (なぜ学ぶのか)」を「なぜ、—自分自身あるいは自分の子どもたちのために—知識を獲得し、記憶にとどめ、教育を受けたいと願うのか」という意味にとって、この問題を、私がとくに専門的に研究対象としているブルターニュを舞台として検討したいと思います。ブルターニュには、この面において、注目すべき特殊性があるのです。

まず第一に、実際、レンヌ学区において⁽¹⁾、2歳児の就学率はフランスで最高位であり、フランス全国平均35.2%のほぼ倍近い68%に達します。このことから、「なぜ学ぶのか」という問いを、とくにブルターニュにおいてたててみることは意味があると言えるように思われます。それも、ブルターニュの若い人たちは、フランスの他の人たちより早く就学するだけではなく、義務教育の最終年限を越えて、より長く教育を受けているからなおさらです⁽²⁾。事実、レンヌ学区での16歳から24歳までの若者の就学率はフランスで最高位です。

しかも、この高い「平均就学年数」は、素晴らしい結果を伴っています。

実際、2000年9月に、全国教育視学監督局と全国教育研究視学行政監督局によってまとめられた、レンヌ学区における教育評価報告書によれば、「フランスの教育制度の達成度を評価する際に通常考慮に入れる主要基準に照らし合わせて、レンヌ学区は、あらゆる面で成功している学区であることが明らかである」とあります。

レンヌ学区の生徒達は、このように総合的に、しかも数年前から、初等科第2学年〔日本の小学校3年に相当〕と、第6学年〔日本の小学校6年に相当〕のクラスで実施されたフランス語と数学の評価テストにおいて、フランス全土で最良の成績を収めている。その後の教育課程においても、中等教育修了及びバカロレア受験率において、レンヌ学区は高水準に達している。レンヌ学区は、一世代のバカロレア受験率で全国2位であり、世代別バカロレア資格保持者数では、フランスで最高のパーセンテージを占めて、全国の学区の中でつねにトップである。さまざまな試験の成績はつねに全国平均を上回り、そしてブルターニュは退学者数が最も少ない地方の一つである¹⁹⁾。

このようなブルターニュの人たちの教育成果の高水準を、この地方の社会・経済的特徴によって説明することはできません。

レンヌ学区においては、教育制度の成果の質が、通常用いられる指標によれば、社会・経済状況から期待しうる値をはるかに越えている。これは諸要因の影響を免れる可能性を示すものとして希望を抱かせる結果である。しかし同時に、この社会・経済状況が指標によってどのように測定されるのかと考えてみると、レンヌ学区は、この観点では、指標によって示されている以上に恵まれているのではないだろうか。いずれにせよ、「文化的」側面というものがある、これは当然ながら数値化するのは難しく、レンヌ学区で教育制度に携わる当事者たちは、この「文化的」側面がとくに恵まれていると明らかに受け止めている²⁰⁾。

したがって、全国教育視学総監の仮説とは、ブルターニュの学校教育の成

功は、ある程度は、特殊な「文化的」側面によるものではないかということです。私はこの発表で、その仮説について検討し、掘り下げてみたいと思います。その際、三つの側面を考察したいと思います。すなわち、伝統、知育、そして教育です。

1. 伝統

19世紀に、フランス文学においては、ブルターニュの人たちの人物像は、粗野で、知恵遅れで、教養のない農民というステレオタイプに固定されました。これは、確かに19世紀における文盲というおそらくブルターニュの歴史の中で最も暗部である一現実に対応しているのですが、しかし、それは数世紀にわたる口承の伝統をまるきり評価しない結果でした。

魂の救済

ブルトン語で授業（レッスン）を指し示すのに用いられる語は、今日でもなお *kentel* であり、これは古代ケルト語の語幹 **kantalon* に由来していますが、これは古代には「歌、呪文」を意味していました。そこで、*kentel* は最初は「歌いながら学び、朗唱されたレッスン」を指していたにちがいないかもしれません。それとは逆に、フランス語の《*leçon*》は、ラテン語の *lectio* から来ていて、これは、書かれ、読まれたテキストを参照させるものです。このようにして、二つの文化——一方は口承、他方は筆記——のあいだの相違が、いわば化石のように *kentel* と *leçon* という二つの語に固まってしまっているわけです。

古代においては、ドルイド僧がケルトの若者たちの教育者でした。それは、クリスチアン＝J・ギュイヨンヴァハとフランソワーズ・ル・ルーによれば、「インド-ヨーロッパ語族の宗教組織においては唯一の事例であり、ローマに

も、ギリシアにも、はたまたゲルマニアにも、これに類するものはなにひとつ存在しない⁽⁴⁾」のです。ドルイド僧は書字法を知っていましたが、しかし彼らの教を文字に託すのを拒み、ユリウス・カエサルが伝えるところによれば、彼らの生徒たちは膨大な韻文を暗記しなければならなかったのです。修業は20年間続きました。それから、ギュイヨンヴァハとル・ルーによれば、生徒たちのうちのおよそ5パーセントから8パーセントがドルイドの高位に上る望みがあったのです⁽⁵⁾。

しかし、「なぜ学ぶ」のでしょうか。なぜ、20年もかけて何千行もの韻文を覚えようと努力するのでしょうか。なぜなら、この膨大な修業の代償として、*dru-uid すなわち「大賢者」になって、普遍的で無制限と見なされる能力を有し、王にも勝る威光を有することになるからです。ドルイド僧はほかの人間たちとは異なり、ドルイド僧の言葉は神聖なものでした。したがって、学ぶことが、彼を人間の条件から救済し、彼をほとんど地上の神ともいえる、共同体の真のリーダーとしたのです。

「民族」の救済

ローマによる征服とキリスト教化によって、ドルイド教は4世紀末に姿を消しましたが、その影は5世紀から16世紀まで残存しました。ドルイド教の遺産は、「聖人」と詩人のあいだで分かち持たれたとレオン・フルーリヨは説明しています。

詩人がなお神を歌うのにたいして、聖職者はドルイド僧の宗教的職能の主要な部分を受け継いだ。詩人がもはや医師ではないのにたいして、「聖人」はなお医師であり続ける。両者とも、予知能力と靈感を夢の中からくみ取る。「聖人」は詩人よりも多く権力にかかわる、というのも、聖人はしばしば王の近親者だからだ。両者とも弟子を養成するが、聖人はまた外交官、組織者でもあり、その権力を中世以降まで保持する。それに対して、アルモリカでは、

詩人は、12世紀までは後援と庇護の実施により、また彼らの芸術への報酬としての贈与金によって保護されていたが、以後、ケルトの風習とともに衰退へと向かう⁽⁶⁾。

詩人は、書字法に頼らずに、作品を作っていましたが、それはしばしば長いものでした。ときには、詩人は盲目でした。あるいは盲目ではなくても、作詩するのに夜の闇に沈潜し、「眠りの魔術」hun-vre（ブルトン語で「夢」）によって靈感を得るのです。ブルトン語の詩法は複雑で、その難解な韻律法は吟唱詩人の養成所で習得されるもので、17世紀初頭までそのような養成所が維持されました。「中世をとおしてずっと、ブルターニュのあちこちにある礼拝堂の多くが養成所を置いていた」とレオン・フルーリヨは説明しています⁽⁷⁾。

ここでもまた、なぜ学ぶのでしょうか。なぜ何千行もの韻文と詩作の難解な方法を身に付けるのでしょうか。なぜなら、一方では、詩はどれにでもすべてお金が支払われ、詩人は、何世紀ものあいだ、自分の芸術で生きていくことができたからです。他方、詩人は「民族の記憶」の保証人だったからです。「『アルメス・ブレダイン』に言われているように、島全体と、アルモリカに広がる“ブリソニック”のというよりはむしろブルターニュの祖国愛を、詩人が擁護する」のです⁽⁸⁾。詩人は、家系図とその家父長、法と条約、そして神話的人物の思い出を記憶していて、その再来を予言するのです。レオン・フルーリヨによれば、「詩人の役目を要約すれば、その民族との緊密な関係において、詩人は民族の記憶であり、靈感であり、そしてその意識であり案内人でもある⁽⁹⁾」のです。

民衆の救済

しかし、やがて学識ある詩人はブルターニュの風景から消え去ります。

ブルターニュものはつねに関心をひいているが、ただし、それが翻訳され脚色されるという条件付きである。Bard という高貴な語は、ついには「村の楽士」と訳されるに至った。詩人の主要な二つの種類のうち、より上位にあった庇護された詩人は13世紀以後姿を消す。より評価の低い放浪吟遊詩人はパス=ブルターニュで19世紀まで続いた。ちなみに、ルナール〔13世紀の北仏恋愛詩人〕は彼らの習慣をまねたのだった。彼らのいくつかの特徴は、「教養のある」乞食や、大衆向け預言者や放浪者のあいだに残存している⁽¹¹⁾。

大衆の口頭伝承は、このようにして19世紀まで田舎で維持され、部分的には今日までも続いています。この伝承の特徴は、類いまれな豊かさで歌われ（哀歌 gwerz と楽しい歌 son）、もしくは語られた遺産が口から耳へと伝えられるところにあります。この伝承の保持者の中のある人たちは、例えばマハリト・フュリュブ（1837-1909）⁽¹²⁾ のように本当に並外れています。彼女は、一方の腕が麻痺した状態で生まれ、他方の腕は豚に噛まれて萎縮しているという乞食で、代理人を立てて巡礼をした人です⁽¹³⁾。彼女は10いくつかの説話と250以上の歌を知っていましたが、いずれの歌も甲乙つけがたい長さのもので、そのうちの数時間ぶんだけが蓄音機用の蠟管に1900年に録音されました（それらはフランス国立図書館に保存されています）。

哀歌 Gwerz は、この口承遺産の最も感動的な部分をなすもので、それは、フランソワ・リュゼルの説明によれば、「暗く、幻想的で、悲劇的な歌で、超自然的な存在、殺人、嬰兒殺し、死闘、裏切り、誘拐、そしてあらゆる種類の暴行を語るものであり、それは封建時代の半ば残忍な風習、通常は11、12、13世紀を思い起こさせ、ブルターニュでは18世紀まで続いた風習⁽¹⁴⁾」なのです。

ここでもまた、そんなに長いそれらの歌や説話を「なぜ学ぶ」のでしょうか。そこには、三つの動機が考えられます。第一に、歌い手は農村においてある程度の社会的声望を有していました。仕事が最高の価値を持つ地方では、優れた歌い手に耳を傾けるために仕事の手を休めるのです⁽¹⁵⁾。第二に、歌や

説話やその他の民衆の口承遺産の数々を学び、普及させることは、ヤン=ヴァンシュ・ケメネールの表現によれば、「心の記憶⁽¹⁶⁾」を働かせることなのです。実際、歌い手は、しばしば近親の故人から哀歌を教わっているのですが、その哀歌を歌うことによって感動を覚え、またその感動を聴衆に伝えるのです。そして第三に、口承文学、なかんずく哀歌 gwerz は、公式の真実にたいして、民衆の真実を救うのです。というのも、哀歌 gwerz は世の中のイメージを伝達し、しかも、裁判ざたの事件や歴史的事件を分析して伝達するものであり、その分析は権力者のものとは異なり、反秩序的なものでさえあったのです⁽¹⁷⁾。このようなブルターニュの口頭伝承に、19世紀以降、重なり合い、次いで取って代わったのが、知育です。

2. 知育

国家の救済

19世紀、教育は国家の事業となります。1870年の敗戦から明けて、国民国家を救うためには、学校を「道徳的“刷新”という莫大な作業の決定的手段⁽¹⁸⁾」とする必要があります。

連帯、規律、仕事、先見の明、儉約といった徳目が、祖国の崇拜、普通選挙、そして1789年の諸原則と同時に賞揚される。ジャコバン党的ナショナリズムと伝統的ブルジョワ道徳とが分かちがたく交じり合う中で、しかしながら、愛国心のさまざまな主題、とくにある形の愛国心すなわち軍国主義的愛国心のさまざまな主題が中心的位置を占める⁽¹⁹⁾。

文部大臣ポール・ベールは、集会「フランスの若者たち⁽²⁰⁾」で国民感情を説き、初等教育で最も普及していた教科書「二人の子どもによるフランス一周」には、「祖国を知ることは、すべての真の公民教育の基礎である⁽²¹⁾」と

断言されています。しかし、祖国への同じ愛によって本当に一体化できるためには、すべてのフランス人が唯一の同じ言語を話さなければなりません。アラン・ディエコフは、それを次のように説明しています。

フランス語の普及と、俚言と呼ばれる地域言語の根絶が、大衆を国に一体化させる鍵を握っていた。全ての市民がフランス語を話し、読むことになるからには、彼らは、パリの中心から発される革命のイデオロギーに直接感化されるだろうし、また、想像上の同一の共同体すなわちフランス国家への帰属感情も持つことになるだろう。したがって、市民の国への忠誠によって織りなされる政治的「社会化」だけでは、民衆を国家共同体に結びつけるには不十分である。そこで、国への帰属という点にだけ成立している政治的な結びつきは、実際には、言語が真の絆となる社会的な結びつきによって繰り返し強化されることになるだろう。ウェーバー流の言い方をすれば、同一の国への帰属は、合理的利害の上だけに成立することはなく、公有化、すなわち同一の共同体への帰属という主観的感情の表出を必要とする¹²³⁾。

では、なぜ学ぶのでしょうか。祖国の救済に寄与するためにです。しかし、それがすべてではありません。

個人の社会的救済

ブルトン語のとくに有名な諺で "Gwell eo deskiñ mabig bihan evit dastum madoù dezhañ" つまり、「小さい子どもには財を蓄えてやるよりも教育をほどこしたほうがよい」というのがあります。実際、最初に述べたように、ブルターニュの子どもたちの「平均就学年数」が今日とくに著しく高く、しかもそれが素晴らしい成果を伴っているのは、以前から親たちが学校に過剰投資しているからです。なぜでしょうか。自分の子どもたちの生活水準を引き上げるのに有利になるようにです。

フランス語を学ぶことが子どもたちに「すべての門戸を開く」と考えて、

自分を救うために学ぶ

ブルターニュの人たちは、第三共和国が促したのと同じように、自分の子どもたちがその母語を放棄することを受け入れました。そこには、かつて先生が学校でブルトン語を話した子どもの首に吊るした恥辱の象徴である、あの「ヴァッシュ」という過酷な方法も含まれています。ブルターニュの人たちは、自分の子どもたちの出世のために自分たちの文化を犠牲にし、子どもたちは、フランス語を習得したうえに、普通のレベルの教育を身につけることによって、公務員になることができて、一般的には自分の地方を去るようになります。このことによって、農村社会の構造喪失がもたらされます。

このようにして、学ぶこととくにフランス語を学ぶことが、ブルターニュの人たちをそれぞれ個人的に救ったのです。しかし、個人の自立は、伝統的共同体の崩壊という犠牲のもとに獲得されたものでした。このことは、政治的に最も進歩的な地域でとくに顕著ですが、今日でも、学位免状のレベルの分布図と左翼への投票の分布図とのあいだの類似は、ブルターニュにおいて驚くほどです。

個人のアイデンティティの救済

学ぶこととくにフランス語を学ぶことは、ブルターニュの人たちの社会的地位の向上に役立っただけではなく、彼らを、世に埋もれた、粗野でしかも獣じみた生活状態から救ったのです。実際、バス=ブルターニュの人たちについて言われていることは枚挙にいとまがありません。例えば、「文明の初期の人間¹²³⁾」であるとか、「原始的で、完成にはほど遠い固有言語の単純さ¹²⁴⁾」を持った言語で表現する人たちであるとか、おまけに、ほんとうの獣であるなどとも言われ、ヴィクトル・ユゴーはそれを「おぞましい陋屋に豚がブルターニュの人たちと入り乱れて暮らしている……はっきり言って豚は不潔だと認めないわけにはいかない¹²⁵⁾」と言っています。

ブルターニュの人たちは、自然と原始性と獣性に結びつけられて、恥辱感

を味わいました。

ブルトン語は決して存在すべきではなかったのです。私はこんな恥ずかしさを生きるくらいなら死んだほうがましでした。私たちは護られることもない一腹のひな鳥です。この言葉は牛と豚のためのものだと言われていました⁽²⁶⁾。

言語の恥は、ときには明らかに出身、とくに家系の拒否とつながっています。

後に私はギャンガンに行きました。私は母に会いに来てほしくはありませんでした。口実をさがしました。いつも仕事ということにしました。本当は、ほかの人たちの前で、母のことが恥ずかしかったのです。そうです、母がブルトン語を話すので、母のことが恥ずかしかったのです。それに、ひどい訛りでした。そうは言っても、私は母に会いたかったし、家の様子を聞きたかったのです。でも、恥ずかしさが勝りました。何て哀れなことでしょうか⁽²⁷⁾。

したがって、フランス語を学ぶことによって、ブルターニュの人たちは劣った状態からもまた獣のような状態からも救われて、文明と人間性の高みへとはい上がることができた……というわけです。しかし、精神科医のジャン＝ジャック・クレスによれば、その報いは抑圧でした。彼は次のように書いています。「私の仮説では、母語への羞恥心は、その言語を無意識と同一化し、抑圧の領域へと同一化することに起因する⁽²⁸⁾」と。

3. 教育

言語の救済

ブルトン語の使用は、第二次世界大戦以後激減しましたが、今から30年ほ

自分を救うために学ぶ

ど前から、ある層の人々のあいだで再習得の対象となっています。それは、ある親たちが自分の子どもの教育計画にあたって、そのような選択をしているのです。しかし、ここでもまた、「なぜ学ぶのか」あるいはむしろ「なぜ学ばせるのか」という疑問が湧きます。というのも、興味深いことに、この何十年か、親は子どもにフランス語の習得という重荷を負わせてきたのと同じように、今日、子どもをブルトン語とフランス語の二言語教育の学校に入れている親の多くは、自分自身ではブルトン語を学ぶ努力はしていないのです。

すると、このような二言語教育学校の生徒たちの親の、本当の動機は何なのでしょう。彼らの立場からブルトン語を救うためのかわり方なのでしょうか、それとも、前の世代がそうだったように、社会的地位の向上を目指してのことなのでしょうか。現在私たちが知りうるところでは⁽²⁹⁾、教育心理的な次元の動機（子どもの知的発達のために二言語併用が有益である）が、ブルトン語に関する信念を上回っているようです。

しかも、かつてのブルトン語の放棄が、個人的な自立の追求に起因していて、それが農村社会の結集力を犠牲にしてなされたのと同様に、今日のブルトン語学習は—あるいは子どもを二言語教育の学校に入れるという事実は—、純粹に個人的な行為に属するものであって、いかなる社会背景とも無縁なものなのです⁽³⁰⁾。逆説的なことですが、同じ近代化、同じ個人的自立の追求のために、かつてはブルターニュの人たちの大多数が自分たちの言語を放棄することになり、一方今日では、ブルターニュの少数の人たちがその言語の再習得に向かっているわけです。

共同体の救済

逆説はそれだけにはとどまらないと、私には思われます。かつては農村共同体を崩壊させるような性質のものに見えた事実が、今日ではおそらく逆の

役割をはたしています。19世紀以後、知育がブルトン語とブルターニュの文化の放棄をもたらし、農村からの人口流出をもたらしたと言えます。しかし、今日、すでにブルトン語に関して取り返しのつかないことになっており、しかもブルターニュのある人たちは自分の子どもにブルトン語を学ばせるために一とにもかくにも一学校に頼ってさえいるという状況で、最も驚くべきことは、学校の持つ凝集力の役割ではないでしょうか。確かに、有資格者であるブルターニュの人が排斥されるということは続いています。しかし、ブルターニュで確認できる社会的結束力⁽¹⁾は、ある程度、ブルターニュの人たちの教育レベルによるところがあるのではないのでしょうか。全国教育視学総監の報告では、次のようにこの問題に言及しています。

われわれの対話相手となった人たちは、しばしば、それも異口同音に、ブルターニュ社会についてのある何らかの像を引き合いに出した。つまり、他所よりも緊密な結びつきのある社会機構で、そのため、他所よりも匿名性に埋没することがなく、他人の視線を気遣い、それが良い意味での競争心のあり方を発展させている。また、規則と伝統を守る傾向があり、これは刷新にブレーキをかけることも確かにあるかもしれないが、次には、確実な積極的関与の保証となりうる。そして、母親の役割の重要性、これは、男たちが海に出て、母親たちが家庭の責任を負っていた時代の名残である、といった具合である。もちろん、こういった表象の有効性について疑問を発することはできる。しかし、肝心なことは、このような表象がとても広く共有されているので、それによって、あのような学校教育の成功の一大要因としての調和が保たれて、また、われわれが面接をとおしてずっと確認できた、あの集団的信頼感と連帯感が保たれる、という点にあるのではなからうか⁽²⁾。

ここには、一種の好循環がありそうだと考えられないのでしょうか。社会的結束は勉学への興味にとって好都合であり、教育のレベルが社会的結束にとって好ましいというわけです。したがって、「なぜ学ぶのか」という疑問にたいする答えは、共同体を救うため、となるでしょう。

世界の救済

19世紀末の一人のブルターニュの人間主義者は、この点において明らかに先を行っています。エミール・マソン（1869-1923）は、絶対自由主義者で、一ガンジー（彼と同年生まれ）と同様に、ジョン・ラスキンとヘンリー・デイヴィッド・ソロー⁽³⁾の熱烈な読者であり、全ての個人が例外なく解放されることを熱望していました。彼は、この理想に到達するためには、革命よりもむしろ自己の内的克服をより重視しています。彼は次のように言っています。「それぞれの個人には、こう言わなければならない。この世界全体における生と喜びが、生来の権利としてあなたに属している一ひとつの明白な条件で。つまり、あなたがあなた自身に属することから始め、あなたがあなた自身の克服をしているという条件で。⁽⁴⁾」この自己克服は、彼によると、意識の覚醒と精神構造の変化に基づいてなされるもので、この覚醒と変化は広く教育にかかっています。

（彼の伝記作者の一人であるジャン＝イヴ・ギヨマールは次のように書いています。）革命、それを彼は教育の中に見ていた。彼が描いたように一そして父として、教育者として実践したように一、教育とは人間存在についての絶えざる考察であり、親と子の弁証法的関係であって、親は自分の子どもの教育によってみずからも教育される者となる。（……）それは、根本的に政治的な態度である。彼は、とくに絶対自由主義的素養のおかげで、家庭が資本主義社会への実践的批判のなされる第一の場であることを、明らかに見抜いた⁽⁵⁾。

マソンは執拗に権限を問題にしています。彼によれば、「個人がみずからを解放すればするほど、そのぶんますます彼は自分に固有の道徳的権限に基づくことになる、と期待しなければならない⁽⁶⁾」と言います。ところで、ある個人に固有の道徳的権限とは、その個人が受けた教育における権限の位置によって決定されます。

しかし、友よ、きみの息子や娘が、正確にどの程度まできみを従わせ、あるいは君に従うべきか、知っているか（今までに一度でも知ったことがあるか、あるいは、一度でもそういうことを気にかけたことがあるか）。これは、むずかしい一つの学問だ。すべての学問の中で最もむずかしい。今までに聞いたこともない一つの技術であり、技術の中でも最も驚異的なものだ。そして、なんびとも、その初歩を把握したとかその基盤を築いたなどと自慢することなどできないのだ⁽⁷⁾。

マソンは、最も大きな自由が確立している、ユートピアとしての一つの島を想像し、それは全面的に教育に依存するものとしています。

教室というもののない、すっかり穏やかな教育。しかし、自己の意識と他者の意識を持つように、幼稚で利己的な本能を放棄するように、真の社会的連帯を喜んで受け入れるように、漸進的に社会的訓練がなされること。これが、島民の全員が享受する自由の代価—自由と平和の代価である⁽⁸⁾。

では、マソンによれば、「なぜ学ぶ」のでしょうか。それは、自由な人間になるため、そしてさらには、人類を救うため……なのです。

注

* 国際シンポジウム「学ぶことの意味」«Pourquoi apprendre?»（2003年5月17日、レンヌ日本文化研究センター Centre de recherches sur la culture japonaise de Rennes 主催、於レンヌ第2大学）での発表。

なお、本文中の〔 〕内は訳者による補注である。

(1) フランスで、学区 (académie) とは、教育の区画のことである。レンヌ学区はブルターニュ地方と同じ区分で、コート=ダルモール県、フィニステール県、イレ=ヴィレヌ県、モルビヤン県を含む。ロワール=アトランティック県はナント学区に属する。

(2) フランスの義務教育は16歳までである。

- (3) Inspection générale de l'Éducation nationale et Inspection générale de l'administration de l'Éducation nationale et de la recherche, *Évaluation de l'enseignement dans l'Académie de Rennes*, Paris, Ministère de l'Éducation Nationale, septembre 2000, p. 7.
- (4) Inspection générale 2000, *op. cit.*, p. 131.
- (5) Françoise Le Roux et Christian-J. Guyonvarc'h, *Les Druides*, Rennes, Ouest-France, 1986, p. 55.
- (6) Le Roux et Guyonvarc'h, *ibidem*.
- (7) Léon Fleuriot, «Langue et société dans la Bretagne ancienne», in Jean Balcou et Yves Le Gallo (dir.), *Histoire littéraire et culturelle de la Bretagne*, Paris-Genève, Champion-Slatkine, 1987, volume I, pp. 17-18.
- (8) Léon Fleuriot, *idem*, p. 18.
- (9) 『アルメス・ブレダイン』 *Armes Prydein* (『ブルターニュの予言』) は9世紀末の詩で、英仏海峡を挟んで両側のブルターニュ人とイギリス人の対立に言及し、ブルターニュ人の神話上の王であるケナン Cynan とカドワラードル Cadwaladr の帰還を予言するものである。
- (10) Léon Fleuriot, *idem*, p. 17.
- (11) Léon Fleuriot, *idem*, p. 18.
- (12) ほかに、次のような人たちがあげられる。ベルトラン夫人 Madame Bertrand, ジャン=ルイ・ロラン Jean-Louis Rolland, ゴアデク姉妹 les sœurs Goadec, モルヴァンとヤン=ヴァンシュ・ケメネール兄弟 les frères Morvan et Yann-Fañch Kemener.
- (13) アナトール・ル・ブラズは、次のように書いている。「マルグリット・フィリップは、時代遅れで魅力的な迷信を深く信じていた。彼女は、精神的にだけではなく、物質的にも、その迷信を糧にして生きている。彼女が稼ぐわずかばかりのお金、それは製糸工という彼女の職業よりも、巡礼者としての名声によってもたらされる。実際、彼女の主な収入源は代理巡礼をすることである。地方で誰かが病気になるやいなや、マルグリット・フィリップに頼ることになる。彼女はまた、故人による誓願を成就することにも長けていた。それぞれの聖人の、好みの住まい、来歴、専門の技を見事に知っている。それは、実に複雑な術で、我々だったらわけがわからなくなってしまうだろう。(……) ある故人の代わりにどこかに巡礼に行く場合には、誓願の対象である礼拝堂のまわりを、むき出しのひざで這って歩き、それを太陽の巡りにさからって行なうように注意す

- る、というも、天体の方向に回るのは生者のためにしか行われなければならないからである。しかし、彼女の行なう風変わりなことをすべて記録したいと思ったら、1冊の本を著さなければならないだろう。」Anatole Le Braz, introduction du tome I des *Soniou* de François-Marie Luzel.
- (14) François-Marie Luzel, Préface au deuxième volume de *Chants et chansons populaires de la Basse-Bretagne - Gwerziou*, 1874. Ouvrage réimprimé en 1971 par Maisonneuve et Larose avec une présentation de Donatien Laurent.
- (15) 「春のある日、私たちが家のまわりの畑を馬鍬でならし、ローラーをかけようとけんめいになっていると、ジェローム・マルティユが我が家の近くを通りかかり、祖母に声をかけて、家から出てきて一緒に歌わないかと誘った。二人は、朝の9時から10時くらいから正午30分過ぎまで休みなく歌い、その間、私たちはすっかり仕事の手を休めて聞いていた。仕事はそっくり中断したまだった。」*Dastum* n°5, *Bro-Fañch, Djezaou ha Kroec'haoù*, 1978, p.46. (ブルトン語からの訳はロナン・ル・コアディク)。
- (16) Yann-Fañch Kemener, «Mémoire du coeur» in *Carnets de route de Yann-Fañch Kemener - Kanaouennoù Kalon Vreizh - Chants profonds de Bretagne*, Morlaix, Skol Vreizh, 1996, p. 9.
- (17) ドナシアン・ロランは、とくに、ロイザル・ラワルク Lociz ar Rawalleg の哀歌は1830年代に犯されて解明されなかった犯罪を扱った歌で、裁判所が守ろうとした真犯人を指し示していると指摘している。Cf. «La gwerz de Louis Le Ravalleg», *Revue des Arts et Traditions Populaires*, 1967, pp.19-79.
- (18) Raoul Girardet, *Le nationalisme français, anthologie 1871-1914*, Paris, Seuil, 1983, p. 70.
- (19) Raoul Girardet, *idem*, p. 70.
- (20) 「フランス人でありたまえ！まず、精神によってフランス人でありたまえ！良識と、明晰さと、上機嫌、快活さ、あの魂の健全を保ちたまえ！フランス人でありたまえ！つまり、率直でありたまえ！怪しげな偽善への嫌悪を維持したまえ！『鳴る島』の詩人、そして『タルチュフ』の作者の子孫でありたまえ。満ちあふれる光に喜び浸っている諸君の精神を、霧や不明瞭な神秘性によって鈍らされることのないように。そのような霧や神秘性が、アルプスのあちら側であれ、ライン側のあちら側であれ、どこから来たものであろうとも。次に、国民感情によって、フランス人でありたまえ。何だかわからないようなコスモポリタニズムによって心を奪われないようにしたまえ。コスモポリタニズムとは、それが赤だろうが黒だろうが、つねに唾棄すべきものである……。 (拍手)。フランス人でありたまえ！我々の高貴な、我々の大切な祖国を、諸君の魂の力をふりしぼって、愛したまえ。かつての表現にもあるように、熱烈な、一徹な、まっしぐらな愛国心でもって、祖国を愛したまえ……。」Paul Bert, Discours prononcé à la distribution des prix de l'Union Française de la Jeunesse le 1er mai 1880, in Raoul Girardet, *idem*, p. 73.
- (21) Raoul Girardet, *idem*, p. 73.
- (22) Alain Dieckhoff, «La déconstruction d'une illusion. L'introuvable opposition entre nationalisme politique et nationalisme culturel», *L'Année sociologique*, 1996, volume 46, n°1, p. 53.
- (23) Archives départementales du Finistère. I N. 192. Rapport du préfet au Conseil général du Finistère, novembre 1831.
- (24) モルビヤン県知事ロワワの見解。Gérard Jaffredou の言及による。Gérard Jaffredou, in «Scolarisation, glottophagie et ethnologie autour de la loi Guizot : le regard de quelques notables et inspecteurs sur quelques Bas-Bretons», Institut culturel de Bretagne, *Du folklore à l'ethnologie en Bretagne*, Brasparts, Éditions Beltan, 1989, p. 190.
- (25) Victor Hugo, *En voyage, œuvres complètes* tome II, p. 52, cité in Corbel, Pierre, *La figure du Gallo*, thèse pour le doctorat de troisième cycle de sociologie, Université de Paris-X Nanterre, 1984, tome III, p. 39.
- (26) Témoignage cité par Jean-Jacques Kress, chef de service de psychiatrie d'adultes au Centre hospitalier universitaire de Brest in «Incidences subjectives des changements de langue régionale», in Philippe Carrer et alii, *Permanence de la langue bretonne, de la linguistique à la psychanalyse*, Rennes, Institut culturel de Bretagne, 1986, p. 50.
- (27) Claude an Du, *Histoire d'un interdit, le breton à l'école*, Lannion, Hor Yezh, 2000, p. 41.
- (28) Jean-Jacques Kress 1986, *op. cit.*, p. 50.
- (29) この問題については、今のところきわめて断片的な資料しか入手できない。次の3点の論文があるが、いずれも未刊行である。Jean-Dominique Robin, *Des classes bilingues breton-français : evit piv ? evit petra ? (Pour qui ? pour quoi ?)*, Académie de Rennes, 1994, Mona Ropars, *Enquête auprès des parents d'élèves de la filière privée catholique bilingue du Finistère*, février 1996 et Roger Bodart,

Diwan : questionnaires aux familles, Axe motivations et études, mars 1999.

- (30) Cf. Ronan Le Coadic, *Bretagne, le fruit défendu ?*, Rennes, Presses universitaires de Rennes, 2002, pages 94, 98 et 99, notamment.
- (31) Cf. Ronan Le Coadic, *L'Identité bretonne*, Rennes, Presses universitaires de Rennes et Terre de Brume, 1998, chapitre IX, «Identité bretonne et lien social», pages 373 à 419.
- (32) Inspection générale 2000, *op. cit.*, p. 120.
- (33) ジョン・ラスキン John Ruskin (1819-1900) と、ヘンリー・ディヴィッド・ソロー Henry David Thoreau (1817-1862) は、マハトマ・ガンジー Mahatma Gandhi にとってもエミール・マソン Émile Masson にとっても、真の精神的指針だった。ジョン・ラスキンは、近代経済体制の持つ、衰弱をもたらすような複雑さを問題視して、「富裕とは電気のような力であって、それは、その不均等性と中断とによって作用する」と説明し、手仕事の尊厳と単純な生活を推奨した。ヘンリー・ディヴィッド・ソローは、市民の抵抗と奴隷制の廃止を説いて、次のように述べた。「もし、千人ほどの人たちが、百人ほどの人たちが、十人が、いや、それどころではない。もし、このマサチューセッツ州で、たった一人の正直者が奴隷を持つのをやめて、この社会から身を引く用意ができていて、そのために国の牢獄に閉じこめられたなら、それは、アメリカにおける奴隷制の廃止を意味するであろうに。」
- (34) Lettre d'Émile Masson à Jean Grave, 22 mars 1908, in Émile Masson, *Les Bretons et le socialisme*. Présentation et notes par Jean-Yves Guiomar, Paris, François Maspéro, 1972, p. 98.
- (35) Jean-Yves Guyomar, «Présentation d'Émile Masson», in Émile Masson 1972, *op. cit.*, p. 54.
- (36) Lettre d'Émile Masson à Jean Grave, 3 février 1908, in Émile Masson 1972, *op. cit.*, p. 91.
- (37) «Bébé et la révolution», *La Plèbe* n°2, 20 avril 1918, in Émile Masson 1972, *op. cit.*, p. 272.
- (38) J. Didier et Marielle Giraud, *Émile Masson, professeur de liberté*, Chamalières, Éditions Canope, 1991, p. 288.